「葦」第43号発刊によせて

奈良県立医科大学附属病院
看護部長　　正木　幸美

2011年は3月の東日本大震災、9月紀伊半島大水害など大きな災害被害がもたらされた年でした。災害時に看護職として使命が果たせるかは、個人だけではなく日頃の組織としての姿勢が重要になってきます。P.F.ドラッガーは「組織はその分野において社会に貢献するために存在する」と論じています。私たち看護職が医療分野においてどのような看護サービスを通じて地域社会に貢献するかは、時代によって取り巻く社会や環境の変化に応じることとなります。私は看護部が対話型コミュニケーションとエンパワーメントが存在する参加型マネジメントが取れていれば常に活性化するのではないかと考えていましたが、この1年間、地域社会や病院組織からの期待に沿える看護サービスができたでしょうか？組織として常に振り返りと同時に飛躍前進することが求められています。

2011年5月には病院機能評価Ver.6.0認定証が届きました。2010年から2011年にかけては看護専門外来の一部開設、がんサロン「なごみ」開設、メディカル・バースセンター開設などがあり、看護の力が発揮できた年でもあったと思います。また2009年2月と、2010年1月に、インドネシアから来日した看護師候補生を受け入れました。本人の努力や各部署の協力で2012年3月に2名が国家試験に合格したことは看護部にとってうれしい出来事でした。

看護力向上には教育が不可欠です。2010年度に始まった看護学科との連携・協同は、今年度臨床において看護教育に携わる看護師の称号や役割について具体的な検討に入りました。病院でも看護師研修室が整備され、理論と実践を結ぶ教育がより良い環境の下で行われています。「葦」に掲載された研究は看護部だけではなく多くの職種や学生・他病院の人々の目にとまります。2011年度の看護研究で臨床の場で継続して実施されている研究はどの程度あるでしょうか？各所属で検証し実践していくことが日常の看護ケア向上につながり、看護部の財産になっていきます。教育的な視点からもこの財産の蓄積が大きな役割を果たしていきます。

奈良県でも行政と医療現場が協力して2010年から看護の質向上および働き続きられる環境整備に取り組み、まず県立病院から実践されました。光明皇后の施浴伝説から日本の看護の原点は奈良の地にあるということから「豊かな知識、確かな技術と奈良という地域に古来より受け継がれた優しい心を融合」をコンセプトとした「奈良看護」という言葉が生まれました。このコンセプトは臨床・教育の双方にいえます。看護の心が先輩から後輩へと紡がれ、今後も看護部が病院組織や社会に貢献できることを願っています。